



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	音楽科が考える「深い学び」への取り組み（各教科が考える深い学び）(fulltext)
Author(s)	原口,直
Citation	教育と研究 / 東京学芸大学附属世田谷中学校(44): 19-22
Issue Date	2017-10
URL	http://hdl.handle.net/2309/148772
Publisher	東京学芸大学附属世田谷中学校
Rights	

音楽科が考える「深い学び」への取り組み

音楽科 原口 直

1. はじめに

平成33年4月から中学校で完全実施される次期学習指導要領が告示されました。小学校での英語教育やプログラミング教育などが注目されがちですが、中学校においても音楽科の目標を比較すると大きな変化があります。

【現行】

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。

【次期】

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を次の通り育成することを目指す。

下線部分は今回新たに追加された言葉です。

この中で『生活や社会の中の』という観点を本校の音楽科では以前よりおこなってきました。今回

の告示でその意味や方向性が明らかになったと言えます。ただ単に知識を得るだけでなく、得た知識をどう使うか、過去の学習や他の教科につなげるか、どう生活に落とし込んでいくかを考えることが「深い学び」につながると考えます。

そもそも『音楽』は生活や社会の中にあるじゃないか、と思うかもしれませんが。家の中でも、街に出ても、音や音楽のない場所は少ないです。しかし、学校で目指すものは『音楽科』つまり学問としての学びが必要です。生活や社会と結びつけるのは、意識的におこなわないと案外難しいのです。これからの3カ年の研究の中で、今までの授業にさらに意味を持たせて実践を重ねていきたいと考えています。

ここでは、6月におこなわれた公開研究会での授業をもとに具体的な学びを紹介します。

2. 「深い学び」につながる実践

(1) 授業内容

〔対象〕 第2学年B組

〔教材名〕

『交響曲第5番 ハ短調』

(ベートーヴェン作曲)

[目標]

- 楽曲に興味を持ち、意欲をもって鑑賞できる。
- オーケストラやホールから、生活や社会との関わりを考えられる。

[指導計画]

1 時間目

- ・この曲が演奏される、近日中のコンサートを紹介する。
- ・楽曲の基礎的な知識を得る。
- ・鑑賞する。

2 時間目

- ・楽曲の基礎的な知識を得る。
- ・オーケストラについて学ぶ。
- ・ホールについて学ぶ。

下線部分は『生活と社会に関わる』につながる内容です。後述で詳しく説明します。

3. 授業の構造

『交響曲第5番 ハ短調』いわゆる『運命』は1947(昭和22)年度の教科書に初めて掲載されてから、途絶えた時期がありながらも1977(昭和52)年度に再掲され、最新の教科書にも今なお変わらず掲載され続けている定番の教材です。この教材を使うのは、学習指導要領が変わっても新しい曲を学びなおす必要はなく、誰でも同じ曲で新しい内容を教えることができますと発信したいからです。

(1) 根拠を明らかにする

音楽を鑑賞するための理論なくして、学問としての音楽科は成り立ちません。生活の中でただ聴くなら「なんとなく緊張感がある」「なんとなく怖い」「なんとなく印象に残る」という感情が起こって終わるかもしれません。それも聴き方の一つです。しかし授業では「なんとなく」を分析し考えていく力が、鑑賞をする上での基本的な知識となります。

例えば、今回の教材で言うと、「なんとなく緊張感がある」のは、始めが休符であるリズムが関連しています。「なんとなく怖い」は短調の旋律、切迫する速度、次々にずれたり重なったりするテクスチュア(音の重なり方)に関連します。「なんとなく印象に残る」は始めの音楽が繰り返されるソナタ形式、曲中に約300回も出てくる同じ旋律やリズムが関連しています。「なんとなく」にはすべて音楽的理由があるのです。それを感じ取るためには基本的な用語の知識がなければなりません。これらは全学年で毎回の授業の始めに行う『本日のOverture(序曲)』で聴き取りやすい曲を用いて、少しずつ繰り返し身につけています。

(2) 基礎的な知識

曲のもつ基礎的な知識の一つひ

とつは普遍的なものであり、鑑賞において、おさえなければならぬ事項です。

①作曲者

生涯や他の楽曲

②オーケストラの楽器

楽器の名称や分類

③ソナタ形式

提示部・展開部・再現部を聴き分ける。

④動機

「ジャジャジャジャー」が各楽器に形を変えて300回以上出てくることを知る。

※学習指導要領の指導事項

4. 「深い学び」につながる手立て
 基礎的な知識を得て、聴いて、感想を書いて終わり、では「深い学び」につながる授業ではありません。授業の中で生活と社会と関連付ける手立てが、授業の中の下記の項目です。

1 時間目

・この曲が演奏される、近日中のコンサートを紹介する。

まず、曲自体は200年以上前に初演された曲であり、歴史は長いです。しかし、今でも人気のある曲で1年間に数回は様々なオーケストラによって都内で演奏されます。よって、曲そのものは古くはあるけれど、それを今でも演奏し

ている団体があり、好んで聴く聴衆がいるということを知らせます。これにより「昔、聴かれた曲」でなく「今現在も聴かれている曲」であり、現在の生活に結びついているのだと意識付けさせます。

2 時間目

・オーケストラについて学ぶ。
 ・ホールについて学ぶ。

次に、オーケストラに目を向けさせます。全国の団体、関東の団体を具体的に挙げて、その財政状況も話します。ホールは23区内にある大型ホールの紹介をし、こちらも財政状況を話します。オーケストラもホールも維持に大変お金がかかり、赤字であることを知ります。

その中で、企業の冠を配したオーケストラ、ホールに着目させます。なぜ、利益を求める企業が赤字が出ると見込まれるオーケストラやホールを所有するのかということを考えさせます。

オーケストラは関東の読売とNHK、ホールはサントリーとNHKを例に挙げます。NHKがなぜ持つかについては、生徒はすんなりと意見が出ます。番組や収録などで使われていると想像が付きやすいのです。読売は読売新聞のホームページのサイトを見ると、事業が多岐にわたっていることに気

づきます。新聞発行の他、野球が好きな生徒は巨人軍、他に読売ランド、日本テレビといった読売が持つ他の企業が挙げられます。大きなグループ企業の中で、オーケストラはそのうちの一つであることに気づきます。

生徒がもっとも頭を悩ませるのはサントリーです。サントリーという会社自体は大変身近な存在にあり、ビールやジュース、お茶などの名称はすぐにあがります。しかし、なぜ都心に大きくて上質なホールを持つかというとすぐに答えは出ません。はじめは「ホールで飲み物を売れるから」という理由もあがりました。それも重要な理由の一つですが、それだけではないことを説明し、グループで考えさせます。そうすると、様々な意見が出てきます。

【企業がオーケストラやホールを持つ理由】

- ・ホール代を徴収できるから。
- ・企業の宣伝ができるから。
- ・企業の知名度を上げるため。
- ・チケットをお客さんにプレゼントできるから。
- ・会社の取り組みだから。
- ・企業のイメージを上げられるから。
- ・他で余裕だから。
- ・文化を守る気持ちがあるから。
- ・社長が音楽が好きだから。

今回の公開研究会ではサントリーホールから担当者を授業の助言者としてお招きしました。サントリーの本当の狙いは、その授業の中では正解として出さず、生徒の考えた意見を尊重・共有するにとどめましたが、授業後にサントリー芸術財団の取り組みや理念についての冊子を配布しました。

4. おわりに

音楽科は音楽家を育てるための授業ではないことを忘れてはいけません。本校に赴任して4年目になりますが、音楽家に続く進路を選択する生徒は4年間で1名だけでした。また、音楽家になるための技術は幼少期から続けている習い事や外部の専門的なレッスンによるものです。

つまり、育てるべきは音楽をやる側の音楽家ではなく、その音楽を支える市民＝聴衆なのです。支える市民とは、コンサートに通ったり、CDを購入したりするだけでなく、企業に勤めた場合にその理念に賛同したり、税金の使い道に文化事業があることに理解したりすることも含まれます。このように考えると、音楽を支えているのは全員だと言えます。音楽に対する理解のある皆さんになって欲しいと願い、授業の中にそのような手立てを入れていきます。